



内田百閒「岡山市方言集稿本」論：個人的な方言調査として

朱，信樺

(Citation)

綜合文化, 1:148-161

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100496709>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496709>



〔論文〕

内田百閒「岡山市方言集稿本」論

——個人的な方言調査として——

朱 信 樺

(CHU Hsinhua)

1 話し言葉への関心

内田百閒の創作を、言葉それ自体という観点から評価する評論は数多い。神秘的な雰囲気を持つ小品文『冥途』連作に始まり、ユーモラスな語り口を特徴とする戦後の『阿房列車』シリーズに至るまで、百閒作品は総じてその言葉の巧みさが評価されてきた。こうした評価は、専ら一人称「私」を語り手にした作品に集中している。だが、1920年代後半から30年代半ばまでは百閒にとって多産期にあたり、一人称叙述の枠組には収まらないさまざまな作品を発表した。『百鬼園随筆』（三笠書房、1933・10）の発表に前後して、百閒は随筆や小品文『冥途』連作とは異なったスタイルの文章を手掛けていた¹。

それらに並行して、百閒は言語あるいは国語についての考察をいくつかの文章にまとめている。たとえば「谷崎潤一郎の送り仮名法に就いて」（『東京朝日新聞』1935・2・13）では、谷崎が『文章読本』（中央公論社、1934・11。以下傍線は原文）で示した送り仮名の表記法に批判を加えている。谷崎はここで、「クラツテ」を誤読されないように「食らつて」と書くことを一例として取り上げ、これが成り立つならば「働らいて」「眠むつて」「勤とめて」という送り仮名も成り立つと述べた。しかし、前者の送り仮名は「食つて」と区別するために必要であるが、後者の三例の場合「文法上の根拠は全然ない」。このように説く百閒は、谷崎の主張が「一層国語を混乱させる禍因となる事を恐れる」と述べ、あわせて「活用する語尾だけを送る」と規定した国語調査会の送り仮名法の胡乱さに文法的な観点から批判を加えた²。

こうした議論は、百閒が当時の国語政策に関心を払っていたことを物語る。西井弥生子によれば、百閒は実作において『漱石文法稿本』（林原耕三『漱石山房回顧・その他』桜楓社、1975・6に所収）に学んだ表記法を用い、1930年代からは一連の評論によってこれを一般化したという³。このように、表記を均質化する国家の方針と相即した「文」の問題については考察が行なわれてきたが、百閒における「言」の問題については死角化されている。そもそも百閒にとって言文一致とは、「言」つまりは母語としての岡山方言を抑圧す

1

百閒がこの時期にのみ手掛けたジャンルとしては、お伽噺が挙げられる。御伽噺集『王様の背中』（楽浪書院、1934・5）には表題作の他、岡山地方の伝説を翻案した「桃太郎」が収録されている。

2

百閒は同様の主張を「恐しいか恐ろしいか」（『文芸通信』1935・3→『凸凹道』三笠書房、1935・10）でも繰り返している。また、送り仮名の問題は「動詞の不変化語尾に就いて」（『東炎』1935・2）においても考察されており、同じ主張を繰り返した文章を、戦後に出版した『禁客寺』（ダヴィッド社、1954・10）に再録し、1958年12月13日の『毎日新聞』にも同内容の記事が掲載されている。

3

西井弥生子「内田百閒「動詞の不変化語尾について」の役割——国語施策との関わり」『青山語文』2024・3

るところに獲得された「文」であった。しかし「文」を構築する試みと並行して、百間は自分自身の「言」を探求する試みを行なっている。「岡山方言集稿本」(『方言』1935・7～1936・8)がそれである。

発端は1914年頃にまで遡る。1916年1月、陸軍士官学校ドイツ語教官に任官された百間は、嵯峨の屋御室こと矢崎鎮四郎の知己を得た。「序説」によれば、百間は「当時の露西亜語教官嵯峨廼屋主人矢崎鎮四郎先生に、自分の集めた方言の中から、標準語としても通用するもの」を排除する作業を依頼したという。当時の百間には「微妙な限界にある言葉の鑑別」ができなかったからである。

また、「さう云ふ仕事は又数年後の大正十年頃にも故長野初に手伝つて貰つた事がある」とも記されている。すでに調査が進んできているように、長野初は、野上豊一郎の紹介を通して百間に師事した女子大学生である⁴。長野の出身は熊本県天草市であり、幼少期に父親の仕事柄で台湾台北の士林に住んでいた。「故長野初に手伝つて貰つた」とあるが、東京出身の嵯峨の屋御室による「鑑別」と同様のものでは定かではない。なお、現在辿ることのできる範囲の日記を参照すると⁵、「方言カードの整理」⁶について記されるのは1936年1月5日であり、その後の6月、7月に、数回の執筆記録が残されている。

百間が「岡山市方言集稿本」を『方言』に掲載したのは、1935年から1936年までのわずか四回にとどまる。連載の中断後、1939年7月10日の百間の日記には、「丸ビルに行つて雨宮に会ふ。国民学術協会の岡山市方言集の補助の件はだめであつた」と記されている。同協会は、純学術団体というスタンスをとっている。理事の一人である長谷川如是閑を主幹とする「日本文化史」の部門が、「研究に対して三ヶ年間に四千五百円補助」の項目を設けた。「一国の文化の種々の部門、即ち、思想、学問、宗教、道德、芸術、言語、風俗、習慣などの歴史的、実証的研究」が奨励され、研究を通して「国民的性格の特徴を見出す」という指針が定められている⁷。百間は日記に「岡山市方言集の補助の件はだめであつた」と記すが、方言研究により国民学術協会のこの補助金を獲得しようとしていたと見られる。わずか四回の連載で途切れた方言調査だが、岡山方言への関心およびそれを活字化しようとする百間の意志は、その後も持続していたのである。

前述したように、方言採集の調査報告を発表した時期は、国家による「標準語」の形成が推進された時期である。一見すると同時代の関心に沿って発表された百間の調査報告は、そうした動向のなかでいかなる性質を備えているのか。本稿では、郷土岡山を離れた百間が編纂した「岡山市方言集稿本」(以下「稿本」と略記)について考察し、その方言研究としての特質を探り、さらに「稿本」は同時代の方言調査とはどのように異質なもののなのかを明ら

4

山本一生『百間外伝これくん風到来』(中央公論新社、2024・1)。百間の生前では行方不明とされていたが、山本は結婚で改姓した長野が死亡したことを報じる新聞記事を発見している。

5

『百鬼園戦前・戦中日記 上』(慶應義塾大学出版会、2019・5)を参照。本書に収録される日記は、昭和11年1月から昭和15年6月までである。

6

方言カードの現物は現在、岡山県郷土文化財団に所蔵されているが、経年劣化のため非公開となっている。

7

国民学術協会編「(附)国民学術協会概要」『学術の日本』中央公論社、1942・4

かにしたい。まずは同時代における「国語」形成の機運の中で展開された方言研究の動向と、そのなかでの岡山方言研究の展開について概観しよう。

2 同時代の岡山方言調査事情

安田敏朗が指摘するように、1902年に国語調査会が行なった方言調査は、「方言ヲ調査シテ標準語ヲ選定スル」と掲げたとおり、各地方の言葉を「方言」と定め、その中から一つの「標準語」を洗い出すことを目的とした。安田によれば、1878年には『『芸術雑誌』に面読斎主人の筆名で、外国人に対して恥ずかしくない方言辞書を作ろうという提案が掲載された』という。その後、『人類学会報告』や『風俗画報』を主な媒体として、各地から寄せられた方言の投稿が紹介された。安田によれば、新村出はこうした方言蒐集の状況について「語彙は沢山ある。それも語彙だけあつて、その写し方や採集し方は、粗雑である、多くはたいした参考になりかねる」と批判していたという⁸。

安田も注目しているように、明治期に全国的な方言調査の中心を担ったのは、面読斎主人こと東条操である。東条の『方言と方言学』を確認すると、明治期の岡山方言資料報告は全国各地の方言資料報告と掲載媒体を概ね共有している⁹。しかし昭和期に入ると、『山陽新報』に加えて『岡山文化資料』（奥山書房、『あく趣味』より改題）が主要な掲載媒体となった。そのことは、東条が1944年に編んだ「方言論文目録」¹⁰の項目「中国」から窺われる。

1920年代後半に入ると、調査内容から掲載媒体にいたるまで、方言研究は大半が柳田國男の影響下に置かれた。「稿本」の掲載の経緯は、柳田の弟子であり、『方言』の編集を務めた高藤武馬の「編集後記」（『方言』1935・7）に詳しい。百閒について「氏は今更紹介するまでもない知名な文学者ですが、自ら進んで本誌のために稿を寄せられ」たとし、本稿が「今回、多忙の中から整理を思ひ立たれたもの」であると記されている。ここで示唆されるように、柳田民俗学とは直接に関わりがない「文学者」である百閒は、『方言』の執筆者としては異端の存在だったと言える¹¹。だが、方言調査にあたって百閒が柳田の言説を意識しなかったとは考えにくい。事実、百閒が1922年に文壇にデビューする以前から柳田を読んでいたことは、吉川望によって考証されている¹²。

百閒の「稿本」のうち「あの部」が掲載された『方言』（1935・10）には、橋浦泰雄の「静岡県 周 智郡 気多村語彙」が掲載されている¹³。1920年代より日本プロレタリア文芸連盟の中心を担った橋浦は、1925年9月に東京美術学校で行われた「南島研究の現状」をタイトルとする講演会で柳田の知己を得た。原始共産制に関心を寄せた橋浦は、同月遠野を含む村落に足を運び調査

8

安田敏朗『〈国語〉と〈方言〉の間——言語構築の政治学』人文書院、1999・5、42頁。

9

東条操「附録 二 方言論文目録 地方八（中国）」『増補版 方言と方言学』春陽堂、1944・8を参照。明治期には、『芸術雑誌』『人類学会雑誌』『風俗画報』『言語学雑誌』の四誌が方言を対象とした論文を掲載していた。

10

東条操「附録 二 方言論文目録 地方八（中国）」『増補版 方言と方言学』前掲。

11

例えば、前掲『方言』1935年7月号には、津軽方言研究を専門とする北山長雄による「津軽方言語釈（副詞の部）」、京都武道専門学校国語研究会による「人倫語彙全国方言一覧表（代名詞）」などの考察が掲載されている。この他には、橘正一による書評「『土佐の方言』の成立」や、ドイツ出身の言語学者フーゴー・シュハルトの「音韻法則について少年社文法学派を駁す」の翻訳が掲出されている。

12

百閒はメーテルリンクの戯曲『侵入者』を「夜気」と題して翻訳していた（『校友会雑誌』1909・12）。吉川望「内田百閒の習作期作品『鳥』における幻想性の萌芽——メーテルリンクの初期戯曲翻訳との関わり」（『阪神近代文学』2024・5）によれば、これに先駆けて柳田が発表した評論「読者より見たる自然派小説」（『文章世界』1908・4）には、「イントルーダー」（『侵入者』）についての言及があり、この一文を百閒が目にした可能性は低くないと吉川は指摘する。

13

気多村は1889年に発足した自治体であり、平安期から江戸期までは「気田」とも表記された。詳細は『東与賀町史』（東与賀町企画室、1982・11）を参照。世帯と人口の推移から見ると、橋浦の採集期間の気多村の世帯数は一千強、人口は五千人台であると考えられる。調査期間は「昭和九年 自八月十三日至十一月二日」と明記されている。

14

橋浦泰雄（1888～1979）と柳田との関係については、鶴見太郎『橋浦泰雄伝——柳田学の大いなる伴走者』（晶文社、2000・1）を参照。

15

前項『角川日本地名大辞典 22 静岡県』によると、勝坂村は「山村のために元禄年間以降耕地の開発はみられない。年貢は金納で、売物 2 割出・繭役などが賦課され、朝鮮人使節来朝時は池田舟橋役を務めた」とある（287 頁）。気多を方言調査の地に選定する理由の一つとして、朝鮮人使節の定住が要因と考えられる。

16

子安神社とは、現在静岡県浜松市天竜区佐久間町にある子安神社を指す。1940 年より、もとは大字下から独立し、「子安町」が町名として成立する。調査項目「アゲコ」は、気多村住民の活動範囲は子安神社まで広がっていることを示す、という目的で収録されたと考えられる。

17

柳田國男は、1928 年 3 月の『民族』に考察「虎杖及び土筆」を発表している。この中では、各地域の虎杖草及び土筆の呼称の帰納を通して、方言区域の区画をしている。

18

この考察は、岡山県南部の顕花植物の地方名を主な調査対象とする。調査内容を、①方言名（カタカナ）、②学名、③標準和名（ひらがな）、④科名の順にまとめている。

19

佐藤清明氏資料保存会編「方言・民俗学との出会い」、『博物学者 佐藤清明の世界』日本文教出版株式会社、2021・10

を行い、佐々木喜善と面会した。なお、1935 年には「民間伝承の会」が結成されており、橋浦もこれに関わった民俗学者である¹⁴。

橋浦の「静岡県周智郡気多村語彙」のうち「ア」の部には、「アマ 天井の事」、「アゲコ 字勝坂¹⁵の子安神社へ他の部落が氏子となる事」¹⁶、「アガリイ ハビ 出産後三十三日目の祝日。おこはをつくり鳥居詣りをなす」、「アテ 上の方の事」、「アクト 踵」との五語が収録されている。日常生活のなかの事物や行事のうち、この地方に特殊な語彙であることが、採録の基準であると推測できよう。続く「イ」の部の最初に収録される語彙は「イタンドリ」であり、この言葉は 1920 年代後半に柳田が採集を行った「虎杖」に該当する¹⁷。このように橋浦は柳田の影響下で、言葉から推測される地誌的背景や住民の生活習慣についての調査記録を行っていた。追って確認するように、百間の「稿本」は、橋浦が行なったような民俗学的なフィールドワークによる裏付けが稀薄である。

同時代に展開された岡山方言の調査研究も、概ね柳田の影響下にあった。桂又三郎が主宰した『岡山文化資料』に調査報告を積極的に投稿し、岡山方言調査を活性化させたキーマンに、佐藤清明がいる。佐藤は岡山県浅口郡出身の博物学者であり、『原稿全国妖怪辞典』（中国民俗学会、1935・5）の編者としても知られている。植物の呼び名の調査に着手した佐藤は、「植物の方言と訛語」¹⁸（『岡山文化資料』1929・7）を発表している。佐藤清明の投稿は、「桂又三郎の御命令に依」るものであったという。ほぼ同時期に、同じく岡山出身であり、『岡山文化資料』の初期メンバーである島村知章も同誌に考察を寄せ、両者は相互に連携しながら『岡山文化資料』の方言紹介を充実させた。しかし、1931 年に、島村知章の突然の死去、桂の体調不良により、『岡山文化資料』は廃刊となってしまう¹⁹。

近年、佐藤清明資料保存会の編纂により刊行された『博物学者 佐藤清明の世界』（日本文教出版株式会社、2021・10）でも紹介されているように、佐藤は「植物の方言と訛語」の執筆をきっかけに、当時全国各地の方言を採集していた柳田國男と岡山で対面した。この論文と同号の『岡山文化資料』には、柳田國男の方言論「唾を」が掲載されている。その後の佐藤清明の論考には、柳田の言説を意識したものが見られる。「蝸牛の方言—岡山県下」（『方言月報』1935・6）がその代表であろう。また「岡山県におけるイタドリ方言分布論」（『音声の研究』1931・12）には、柳田が「『方言の小研究 三、虎杖と土筆』（民族三巻五号）に於る全国的に豊富な材料に依つてその比較を試み」たことに「刺戟されて蛇足ではある小地方の方言に現れた諸相から二三の補足」を加えた、と佐藤清明は記している。

同じ時期の方言調査として、『岡山文化資料』の交換雑誌である雑誌『旅と伝説』には、島村知章「岡山方言の形容法」（1929・5～6）が掲載されてい

る。山田敏弘によると、『旅と伝説』（1928・7～1949・1）は、鉄道旅行のガイドブックであり、方言考察にも深く関わる媒体でもあった。山田は本誌について「方言記述並びに研究のあり方のみならず、専門に囚われすぎない方言に対する眼差しを捉える格好の調査対象」たりえていると述べている²⁰。これに代わって30年代半ばから方言調査報告を掲載したのが、『岡山県人』である。本誌は、大阪に設けられ、百間も加わった「岡山県人会」の機関誌である。この他にも、岡山関係者の集いを母体として刊行された雑誌としては、東京大森に拠点を置く「岡山県人社」より発行され、犬養毅が題字を揮毫した『汎岡山』がある。両誌には、岡山県の方言調査および伝説の紹介が連載された。

1938年3月2日の百間日記には、「午後、岡山県人社の久米玄関迄来」と記されている²¹。当時『汎岡山』を主催していた久米龍川の来訪を記したものである。『汎岡山』（1926・1～1943・4）²²には、「岡山県の伝説」と題された記事が連載されている。そのうちの一篇「人肉の市」では、地の文は東京語の敬体によって進められる一方、会話文には「今日はえい天気があす」といった方言が含まれる。岡山地方のものとは異なったステレオタイプな方言をとまなうかたちで、地方の伝説が記録されている。

一方、百間の「稿本」には、岡山市方言のみならず、岡山市と近接する地方の方語彙「中国又ハ関西一般ノ方言」のなかで岡山市でも使う言葉や、「東京語」とは使い方が異なる言葉など、さまざまな語が系統づけられないまま採録されている。とすれば、百間は方言語彙のどのような要素に関心を置いたのだろうか。続いては、「稿本」に収録される語とその例文について詳しく検討していきたい。

3 例文の個人色

百間の「稿本」には実際のところ、「あ」と「い」の部とその補遺しか収録されていない。採録された語彙も数少なく、どのような背景があってその言葉を採録したのかも説明されていない。「稿本」は、「あノ部」、「いノ部」、「あノ部補遺」、「いノ部補遺」より構成され、収録されているのは計131語である。それぞれの語彙については、左のように、①語の読み、②漢字で表記されるものはその表記、③語についての解説や例文、④「標準語」で対応する言葉、という順に表示されている。

「あノ部」に収録された語群の一部について検討したい。第1項として立項された、「ああさん、ああやん」を見てみよう。

20

山田敏弘「雑誌『旅と伝説』における方言研究」『岐阜大学教育学部研究報告』、2022・3

21

『百鬼園戦前・戦中日記 上』慶應義塾大学出版会、2019・5

22

『汎岡山』は1926年1月号が創刊号と見られるが、1943年4月号には終刊号とは明記されていない。多くが散逸し、本稿で確認できた「岡山県の伝説」連載は、1933年1月号、1934年9月号・10月号、1937年3月号・4月号の数篇である。

ああさん ああやん／大きいああさんは長兄の意味なれど又間抜け、馬鹿の罵称ともなる。又単に「あいつはああやんぢやから」と云ひても間抜けの事になる。「やん」は「さん」に対して、目下の者を呼ぶ卑称也。／兄さん

この項目では、「ああさん」「ああやん」を説明するための例文が、「あいつはああやんぢやから」と、岡山地方の方言を含む表現となっている。ここでは、「ああさん」「ああやん」という語についての釈義よりも、実際にそれが岡山地方で用いられる際の発話の一例が示されているのである。

また、「あノ部補遺」には、この語彙について補足するため、「あちやん、あつたか、あ入道、あらあつちんべいろ」という言葉が第52項として収録されている。本来であればその語意が標準語で記されるべきところであろうが、語釈に替えて「あちやんあがつくあんがいも（あん左衛門）、あんこうのあんむくれ、あにかけたら、あんちよこ、あんちよこ」という例文が置かれている。

この例文についての説明は施されていない。だが、鉤括弧で括られた「あん左衛門」は、浄瑠璃や歌舞伎など江戸期の文芸作品にしばしば登場する人物の名である²³。百間とも交流を持っていた岡山の郷土史家²⁴によると、現在岡山美作地域に位置する奥津や日本原あたりでは、山椒魚を「あんこう」と呼んでいるという。その口を大きく開いてエサを待ち、「呑みこむばかり」の姿から、「馬鹿だろう、というところから、“あんこう”の名ができた」という。「あんむくれ」の意味も定かでないが、「稿本」の「凡例」に「方言トシテモ既ニ廃語トナレルモノモ亦録ス」と記されているところからすると、死語である可能性も否めない。続く「あんちよこ」はいわゆる虎の巻と同義の言葉として、今日でも一般に用いられるものである。このような岡山に固有ではない語や死語をも含むフレーズが「岡山方言」と呼ばれるのは、このフレーズが実際に岡山市で口にされていたからであろう。この項目では「岡山方言」であることが、語彙そのものではなくそれが使用される岡山市という場によって担保されているのである。

また、「あんがいも」を含め、例文全体が意味のある語句というより「あちゃん」と頭韻を踏む言葉の連鎖からなる。第52項では、「あ」に限らず任意の頭韻にて「きいちやん、きつたかき入道」「そうちやん、そうたか入道」などと云ふ。子供が相手を嘲罵する時云ふ也」という説明が付されている。「任意の頭韻」に適用できるならば、「あノ部」に立項される必然性が見えなくなるだろう。こうして意味上の相関関係のない語を複合した文は、音韻を意識した囃し言葉を思わせるものである。

なお、頭韻を踏む類歌は、百間の他の作品でも引かれている。岡山の思い

23

例えば、浄瑠璃「けいせい白山禅定」（宝永元年刊→祐田善雄・鳥越文蔵編『上方狂言本3』古典文庫・1964・8に参照。底本＝大東急記念文庫）では、立役「さなだあん左衛門」が登場する。

24

岡長平『岡山風土記 岡長平著作集』第四巻、岡山日日新聞社、1977・11

出を綴った「郷夢散録」（『中国民報』1935・2、23回連載）によれば、環翠尋常小学校幼稚園に通っていた百間が「最初に教わった歌」は、「鴉、鴉、かん左衛門／親の恩を忘れるなよ／^{かり}雁、雁渡れ／大きな雁は先に／小さな雁は後に／仲良く渡れ」というものだったという。これを踏まえれば、「あちやんあがつく」に始まる例文も、郷土岡山市にまつわる百間の記憶と結びついた歌あるいは囃し言葉のフレーズであったと考えられる。

第120項「いひだこ、すみそで、やつていけ」も同様に、囃し言葉であろう。この項目の場合、「飯蛸酢味噌でやつて行け」²⁵との表記に続き、「物事ノ調子ヨク運ブ時ノ無駄口」との解説が配されている。しかしこれらの言葉あるいは音声は「無駄口」となる背景は説明されていない。項目自体が「無駄口」であり、「物事ノ調子」がうまく運ぶことを言い現わした言葉遊びなのである。

このように、「稿本」に収録される語彙についての説明は、調査に基づいた辞書のような形をしているが、同時代の方言調査が専ら収集を進めてきた、天気や行事などにまつわるその地方固有の語彙は収録されていない。これらの項目は語の意味についての説明に替えて、その言葉が岡山市内でどのように使われてきたかを示している。語ばかりでなく、それらの語が使用される場面も併せて記述され、話し言葉（言）の現場を描き出しているのである。

続いて、第2項「あおち風／あをち風／あうち風」、第3項「あかこ」（金魚に与へる餌）、第4項「あかご」（あかんぼ）、第5項「あか、べいろ／あか、すか、べいろ」（あかべ、あかんべ）などが立項される。第2項の説明には、「座布団を平らに畳の上に投げるとか、夜着の袖をはねるとか、書物をばたんと置くとかする際に起こる風。あおち風を他人に当てるは失礼とせらる」とある。文の接続に「とか」が使用される箇所に、口語的な文体の使用が認められる。内容面では、「あおち風を他人に当てるは失礼とせらる」とあり、「あおち風」という言葉それ自体の意味の説明よりも、むしろ「あおち風」をしてはいけないという教訓が含まれている。第41項の「いびをそひ／いびをそへ／いびをしへをする」の場合も、「人の噂をする時、話し相手に話題の人を指さし示す事、当人に対して甚しく失礼なる事とす」と、その行為が「失礼」にあたることが説かれ、記述者の主観が侵入している。

さらに第2項について言えば、「あおち風」という言葉をめぐって、「座布団を平らに畳の上に投げる」「夜着の袖をはねる」「書物をばたんに置く」といった、具体的な行為が想起されている。第5項目については、「あかべをする時に云ふ憎まれ口」と記述されているが、これも同様であろう。柳田國男は方言の収集に際して、その地方の言葉の「語法」や「諺」に注目を促していた²⁶。これに対して「あの部」に立項された五つの項目は、地域の住民たちの活動範囲や行事とは異なった、明確な系統が見えてこない語群である。

25

この語句について、岡長平『岡山風土記』では、「地口・口合」の項目に収録されている。岡は地口を「法律のような力をもって、土地の人々を拘束したもんだ」と規定している。

26

柳田國男の「木思石語」（『旅と伝説』1928・8）では、収集の対象を「言語」、「語法」、「諺（コトワザ）」、「謎」、「トナエゴト」、「歌」の六項目に従って分類することを提起した。

このように「稿本」で不可欠な採用基準となっているのは、それぞれの語が意味する地方固有の風土や行事ではなく、岡山地方における日常的な使用実践である。そこには、当地で生い立った百閒個人の体験が反映されていると見ることができる。そのことは、第 37 項「いなばがらす」からも窺われる。

いなばがらす／因幡鴉／方言と云ふにはあらず。お城（鳥城）の鴉群と山（東山）鴉群と後楽園裏の畑の空に入り乱れて争ふは常なり。又特に形の小さな鴉来りて争ふ事あり。小さき鴉を「いなばがらす」と云へり。

上のように、「岡山市方言集稿本」と銘打つにもかかわらず、収録されている語彙には「方言と云ふにはあらず」という断りが付されているものもある。そもそも方言集に方言ではない言葉を収めたのは、系統的な方言調査を行なうことよりも、百閒の郷土岡山市の風物を記録することを重視する意向によると考えられる。この項目には、百閒のかつての活動範囲が表されている。それは百閒がよく遊んでいた「お城（鳥城）」や「後楽園裏」に近隣する「山（東山）」である。さらに第 46 項「いやし」は、「食物にいやしきなれども、種種の用法あり」と説明され、例文には「いやしの栄さん」という、百閒の本名・栄造を想起させる人物の名が記されているのである。

このように「稿本」には、語彙の選択やその説明、使用例文に作意が含まれている。例文からは、語の意味や発音よりも、それらが岡山地方で使用される場面に百閒が関心を置いていることが窺われる。それらの例文は、語が想起させる岡山の言葉が使用される場面、ひいては、かつてその語を使用した幼少期の記憶を前面に押し出すことを志向する、百閒の編集意図を示唆しているのである。

「稿本」には、百閒が少年時代に疫病の流行を経験したことも反映されている。第 111 項「一本棒」を見てみよう。「一本棒」とは、「伝染病デ死ンダ人ノ葬式」であり、「棺桶ニデカニ縄ヲ掛ケ、棒ヲ一本通シテ前後ヲ担ヒ、巡査ガ附添ヒテソノママ焼場ニ運ビシヨリ」という。1886 年 12 月（明治 19 年）に出版された『巡査至要警察携便』によれば、「虎列刺、腸窒扶斯、赤痢、實布埵利亞、発疹窒扶斯及ビ痘瘡」の六つが指定伝染病と定められ、死者が現れた場合には警察による消毒が義務づけられていた。「稿本」の二年前に発表された『百鬼園随筆』所収の短章「虎列刺」²⁷では、百閒は岡山の自宅の町内にコレラ患者が出た際の思い出を記している。

それから、方に虎列刺が出来て、毎日毎日沢山の人が死んだ。死ぬと直ぐに役人が来て、死んだ者を棺桶に押込み、縄でからげて、それに棒を一本通して、後先を隠坊が舁いで、持つて行つてしまふ。だから虎列

27

内田百閒「（総題）百鬼園随筆」『東京朝日新聞』1933・9・11。『百鬼園随筆』に収録する際の改稿はあるが、「一本棒」の段落には改稿が見当たらない。

刺のお葬ひを一本棒と云つた。

これは百閒の実家の造酒屋・志保屋が倒産した、1905年（明治38年）8月以前の出来事である。「一本棒」という言葉は、百閒の経験に即せば虎列刺^{コレウ}による死者を意味するが、「稿本」では伝染病一般に拡大して意味づけられている。また、例文の一つとして「そねいに（そんなに）西瓜を食べると一本棒になるぜ」と、大人が子供を戒める言葉が挙げられている。こうして百閒は「一本棒」という言葉それ自体を最初に習得した経緯を随筆に著した後、この言葉の使用法の変遷を「稿本」に反映させている。

このように「稿本」には、百閒自身の幼少期の記憶を投影した記述が散見する。「あノ部」第11項「あせもをからせ、もをからせ」は、「汗疣を枯らせ、も（出来物）を枯らせ」と表記されているが、これは、「夕立の時、子供が裸になつて雨に打たれながら唱へる句」であるという。夏の午後に降る「夕立」に、子供が裸になり外に出て、歌いながら雨に打たれる光景が想像される²⁸。ここでは岡山地方のわらべうたが方言語彙として扱われ、それを通して岡山市の光景が喚起されているのである。

28

付言すると、後年編纂された『総合日本民俗語彙』（民俗研究所編。平凡社、1955・6）に「アセモカラシ」という項目が収録される。「岡山市地方で夕立のときに子供が裸になつて雨に打たれながら「あせもをからせ、もをからせ」と唱える」という説明が付され、「（方言五ノ十）」という記述から伺えるよう、「岡山市方集稿本」がそのレファレンスとなる。

4 軽口囃のバリエーション

いぬる／往ぬ／「いぬる、いぬる云うて、中中尻が上がらぬ」子供が遊びつかれて帰らうとする時に「もう、いなう、稲の葉、もどらう桃の葉」と云ふ。去れ、帰れの命令法は「いねえ」「お前の様な奴はいんでしまへえ」

上は、「いノ部」所収の第39項「いぬる」の記述である。「いなう、稲の葉、もどらう桃の葉」の意味は明らかにされていないが、当地で唄われたわらべうたのフレーズである。後年の『広島県民族資料』を確認すると、わらべ詞の部に、唄の始めに「往のう往のうというてせがむ時」とあり、それに続いて「いのう稲の葉 もどらう桃の葉（岡山）」²⁹との記述がある。他にもそのバリエーションとして、佐賀県東与賀町に「もどらう桃の葉、帰らう柿の葉」があるという³⁰。

もちろん、「いぬる」は岡山地方の方言ではない。1935年に出版された『言海』には、「いぬる（動）いぬ（往）ヲ見ヨ」とあり、動詞「いぬる」が立項されている。しかし、百閒の「稿本」では、動詞「いぬる」の語義的な調査よりも、岡山の子どもたちが口にする唄に記述の重点が置かれている。「いなう、稲の葉、もどらう桃の葉」は岡山固有のわらべうたの一節であり、類歌

29

村岡浅夫編『広島県民族資料4』ひろしま・みんぞくの会、1971・1、349頁。

30

『東与賀町史』東与賀町企画室、1982・11、1069頁。

が存在するなかでも特に「稲の葉」という言葉がこの地方の特色をなす。例文を通して、その語が岡山地方で用いられてきた場面、あるいは百閒自身の郷里における記憶が喚起される。百閒の「稿本」は語釈にまして例文を充実させることによって、立項した語彙を個人の経験と結びつけているのである。

このように「稿本」は例文を通して語彙に個人的な体験に光を当てるが、とくに囃し言葉やわらべうたが参照されていることは、岡山方言の発話と幼少期の記憶との結びつきを示唆している。このような観点から、第48項「いりこ」を検討してみよう。

いりこ／炒り粉／言海には、米ノ粉を炒リタルモノ、菓子ノ種トスとあれども、麦粉に限り用ゐる。黒砂糖を入れて湯又は茶にてかいて食ふ。或は赤砂糖又は白砂糖を混ぜ、粉のまま煮て附木にして、はねて食ふ。「弘法大師粉を食うて」の粉はいりこなり。百姓が畑に鋤を忘れたまま家に帰っていりこを食つてゐたら、鴉が屋根の棟で「こをくふか、こをくふか、いりこをくふか、こをくふか」と鳴いたから、余計なお世話だと思つてゐると、その後で「くわは、くわは」と鳴いたので畑のくはを思ひ出して取りに行つた。はつたい粉とも云ふ。(傍線は引用者)

31

大槻文彦『大言海 第1巻』富山房、1932

右のカタカナで表記された文は『言海』からの引用である³¹。「言海には」から始まる説明が示すように、上では、一般的には米粉を指すという説明を外部のテキストに委ね、岡山地方では麦粉を指すこと、この地方に固有の食べ方があることが紹介されている。さらにこのような説明と、鴉のエピソードとが並置されている。この記述はいかにも羅列的であり、無秩序である。ここでは、『言海』の内容、「弘法大師粉を食うて」の説明、百閒が昔聞いたとされる軽口囃のバリエーション、最後に思い出したかのように加えられた「はつたい粉とも云ふ」という説明が、全て「いりこ」の説明として連想されている。

ただし、ランダムな記述からなるこの項の中心に置かれた「百姓が畑に鋤を忘れたまま」以下の記述は、明らかに前後と文体を異にしている。ここまでは文語を基調とした解説調であるが、鴉の段では「から」や「ので」といった表現を混じえた主観の入る表現となる。この挿話では、百姓は鳥の声を人語として聞き取っており、鴉の「こをくふか」「いりこをくふか」という鳴き声が「炒り粉」を「食う」ことに、「くわは、くわは」という鳴き声が畑に忘れた「鋤」にそれぞれ結びつく。

さらに、ここでの叙述は、「余計なお世話だと思つてゐると」と、百姓自身の主観に踏み込んでいる。一連の挿話は、おそらくはある百姓の言葉の伝聞に依拠したものであろう。ところが、「百姓が畑」に行くと始まり、鋤を「取

りに行つた」で締めくくられる段落には、伝聞表現が使われていない。このような叙述は百姓から伝え聞いたことをそのまま再現したものではなく、虚構化の手続きを内包しているのである。

鴉の説明に似たエピソードは、岡山地方の軽口噺のなかにも見られる。

或る百姓男鶏を飼うていた。田圃で仕事をしていて、昼飯時に帰りかけると、烏がクワクワと啼いた。気が付いて見ると、鍬をたれて帰りかけていた。烏という奴はなかなか伶俐な鳥じゃわいとひどく感心した。

家に帰りつくと、鶏がクークーと足もとにつき纏うた。親爺腹を立て「クークー喰うことばかりぬかすな。烏を見い、わしが鍬を忘らつたらクワクワと云うて知らせてくれたぞ」とたしなめた。鶏之きいてトテコーカーと啼いた。

註：備前方言でトテクルは持ち帰るの義。³²

32

島村知章「備前の軽口咄（二）」『岡山文化資料』1930・2

「註」を含めて引用したのは、「備前の軽口咄（二）」（『岡山文化資料』1930・2）の記述である。烏の鳴き声が百姓に鍬を忘れたことを気づかせるという点では、百間が記したエピソードと共通している。このエピソードが『岡山文化資料』に紹介されたのは「稿本」の発表に先駆けている。この記事を実際に読んだかは定かでないが、この軽口噺を百間が知っていた公算は高い。近世以来の口承文芸から百間が影響を受けていたことを示す重要な一例である。

近世に成立した軽口噺は「舌耕文学」³³とも呼ばれるように、口承文学でありながら、言い伝えの利便性のため一話一話が短いことを特徴とする。文字に起こされた上方や江戸の軽口噺とは異なり、地方に存在するそれは庶民のみによって口承されたものであるため、一段と流動性が高く、記録されない可能性も高い。『岡山文化資料』は、岡山市北区旭川に架橋する「京橋」を舞台に、そこで発生したいくつかの笑話を岡山軽口噺として収録している³⁴。軽口噺は、言葉遊び、場合によって方言を会話に織り込んで語られる。多くの場合、それらはパロールとして伝えられるものである。軽口噺で取り上げられる言葉は、二つの意味をかけるもの、特に駄洒落や、音韻に関わるものが多い。

33

宮尾与男『元禄舌耕文芸の研究』笠間書院、1992・2

34

島村知章「備前軽口噺」（一）～（三）『岡山文化資料』1929・12、1930・2、5。

上の話では、「いりこ」についての言及がなく、「喰う」ことを想起させる烏が「鶏」、「鍬」を想起させる烏が「烏」として区別されている。そのことをたしなめられた鶏が、「持ち帰る」という意味と結びつく鳴き声を発したというのが、この話の落ちである。

また、「烏という奴はなかなか伶俐な鳥じゃわい」という一節に見られるように、地の文に方言が入り込んでいる点に注意しておきたい。上の挿話で特徴的であるのは、百姓の内言や発言の再現を通して、叙述のなかに方言の占

める割合が大きくなっている点である。しかし「稿本」第48項の場合、「いりこ」を除いた部分が全て東京語あるいは標準語、つまり百間が文章を作成する際に使う書き言葉に拠っている。「備前の軽口咄(二)」の比較した場合、「稿本」第48項の記述ではあきらかに書き言葉が優勢である。こうして「稿本」の記述、とくにその地の文に当たる箇所は、内容の面では話し言葉の現場との結びつきを示唆しながら、叙述形式の面では標準語が方言を、書き言葉(文)が話し言葉(言)を圧しているのである。

5 記憶の中の話し言葉

同時代には、言葉と音声の関係、もしくは記号と音声との関係について、新たな言語学的な知見がもたらされていた。現在では『一般言語学講義』の書名で知られているソシュールの講義録の邦訳『言語学原論』が、1928年に岡書院から刊行された。訳者である言語学者の小林英夫は、その翌年には同じ書肆よりシャルル・バイイ『生活表現の言語学』の邦訳をも刊行している。バイイは、ソシュールのラングとパロールとの構造を考察の前提としたうえで、後者つまりは口語の重要性を説いたことが知られる。本書では、バイイは口語こそが「真の言語」あるいは「唯一の生得の言語」であることを強調している。

百間は同時代のソシュールやバイイの学説を直接には参照しておらず、上の書物を読んだ形跡もない。しかし、盲目の箏曲家・宮城道雄の口述筆記原稿の整理に1935年から携わった百間には、目で見える文字と耳で聞く言葉と、どちらの方が「純粹」であるかという疑問が頭をもたげてきていた。百間は、ラジオ放送の言葉が「目で読んで初めてはつきりする様な字句を不用意に用ゐるから、時々曖昧になる」ことを不満とする。対して宮城道雄の文章は、佐藤春夫が「語意が二義に互る様なところ」がないと指摘したとおり、盲人であるがゆえに視覚的な文字に影響されることがない。このように論じた百間は、道雄が体現するオーラリティに基づいた文章の在り方こそ「純粹言語」と評した³⁵。

文字よりもオーラルな言語を「純粹」と見る百間の発想は、「口語こそ真の言語である」と強調するバイイの主張との親和性が認められる。「岡山市方言集稿本」が提示するのも、表記から脱却した音声の価値を追求する態度である。1930年代半ばは、標準語の制定、表記の統一をはじめ、国語が形作られると同時に大きく変貌した時期にあたる。「共通語」「標準語」の構築を通して、国民国家の統合の完成が夢想された時代である。このようななかで、「文章」を業とする作家として表記に執着した百間は、書き言葉の統一を求めた。

一方、口に出した話し言葉が標準化されえないことを、百間は「岡山市方言稿本集」を通して証明している。語彙の例文に俗語や子供の唄が入り混じっていることが示すように、「稿本」は話し言葉の性質が極めて強く、一般的な辞書や方言調査と一線を画する。百間においては、「方言」と対をなす「標準語」の概念は、実はきわめて曖昧である。百間は「序説」において次のように言及している。

文章を草するには標準語に拠らなければならない。政治家風の人人が、いつまでも郷音の訛りを看板にしてゐる様なわけには行かないのである。私が岡山育ちである事と、東京生活の家族の関係との外に、言語の芸術なる文章の事にたづさはつてゐる自分の立ち場が、岡山市方言編纂の一つの資格となつた事を自認する。

この記述によると、「稿本」を編纂するにあたって百間が最も重視したのは、自分の「岡山育ち」であることと、「言語の芸術なる文章」を仕事としている点であるという。この言明は、「稿本」の編纂があくまで、個人の関心に沿うものであることを示唆している。さらに、「方言と云ふにはあらず」と明言している語も収録されている通り、「方言」をその地方の特殊な言葉として固定するのではなく、岡山市の風物を収録しようとすることも明らかである。

さらに百間はここで、「文章を草する」際には「標準語」を用いることが不可避であると明言している。ここで言う「標準語」とは、文章の言葉すなわち書き言葉と一体である。言うまでもなく、「稿本」における調査報告は、「文章を草する」際の「標準語」によって、話し言葉を記録する行為であった。ただし考察の「凡例」には、「東京語ト標準語トヲ対立セシムベキ概念ハ明確ナラズ」と記されている。百間にとっての「東京語」は、文字というより、上京後の生活のなかで耳に入る言葉であった。続けて百間は「政治家風の人人」——暗に犬養毅のことを指すと考えられる——が目的を持って「訛りを看板」にすることを非難し、話し言葉としての「標準語」についても言及する。この言及は、文章を書く際に使う「標準語」と、話し言葉としての「標準語」とを混同するところに成り立っている。百間にとって「東京語」と書き言葉との弁別は、必ずしも自明ではなかったのである。

実際、百間は語彙を収集する段階で、当該語彙が方言であるかどうかについて、嵯峨の屋御室や長野初に鑑別を依頼していたが、自身が「標準語」をどのように理解していたのかは、実は曖昧なままである。「方言ナラザルモノヲ方言トシタル誤リモ多カルベキ」、「方言カ標準語カノ何レカノ概念ノ把握不確カナル為チガタモノヲ同一ニ見テソノ云ヒ方ノ違フヲ録シテキルカモ知レナイ」とある。採録した方言も、「採録シタレドモ方言トシテノ意味を忘

却セリ」(第68項 あとくち)といった項目が見られる。吉行淳之介が「正直だが、なんだか頼りない」³⁶と評するように、採録の客観的基準が曖昧であることについての弁明も少なくない。その曖昧さは、「稿本」に採録された語彙の多くが、あくまで百閒自身の岡山市という土地をめぐる記憶と結びついていることに起因している。

百閒の「稿本」は、同時代の国語政策に包含した、標準語の策定のためのレファレンスツールではなく、地方の行事や住民の生活習慣を民俗学的知見から示したものでない。このテキストに綴られているのは、百閒のふるさとへの思いであると同時に、書く現在に東京で生活している自分にとっての過去の言葉である。ここに収められている語彙は、百閒が口にした言葉、上京するまで耳にした岡山市の言葉なのである。

言文一致における「言」は、地方出身の百閒にとって、方言の世界から切りはなされた後に形成された言語であった。しかし、「言」いわゆる話し言葉は、そもそも記録しきれないものであり、百閒のような移住経験を持つ者には、それは統一的なものではありえなかった。「岡山市方言集稿本」は、話し言葉の分類不可能な多様性を証明している。そこに記されたのは、「東京語」とは別様の「言」のありかたであり、記憶の中の話し言葉を通して復元される岡山市の風景だったのである。

*『汎岡山』等の資料を確認するにあたって、岡山市立中央図書館郷土資料担当の方より多大なるご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

(神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程／日本近代文学)